

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

内科的治療を受ける肺がん患者の不安の推移
—告知と治療過程に焦点をあてて—
研究者 柏木 夕香
新潟県立看護大学（老年看護学）

Changes in anxiety in lung cancer patients who will receive medical therapy
: Focus for telling the truth and treatment process

Niigata College of Nursing

キーワード：肺がん患者（lung cancer patients）、告知（telling the truth）、不安（anxiety）.

研究目的

本研究は、肺がん患者の告知に伴う不安の推移を、年齢を分析軸として明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 対象

平成14年7月から12月の間に、N県のがん専門病院に入院した肺がん患者で、入院初期から告知を受け、内科的治療を行うことが決定した45歳以上の患者のうち、研究目的に同意が得られ、かつ告知後5日以内に面接することのできた7名である。

2. 調査および分析の方法

STAIの不安尺度¹⁾を用い、患者の特性不安（患者が本来持っている、人格ともいふべき不安）と状態不安（出来事が有害なものとして判断されたとき誘発される不安）を調査した。調査時点は、告知前と、告知後5日以内の2回である。STAIは自記式で行っても、調査者が面接形式で行っても調査が可能な尺度であるが、調査時は、患者と研究者が2人で面接できる状況を作り、同席して調査を行った。

STAIを得点化・数値化した状態で、告知前後でSTAIによって示された不安得点に変動があるか、その傾向を分析した。また、不安得点の推移が、対象者の年代により異なるのかどうかを比較検討した。なお、STAIは得点が高いほど、高い不安を表し、状態・特性不安とも最高は80点、最低20点である。

研究結果

1. 対象者の特性

対象者の構成は、65歳以上2名（平均年齢72.5±2.5歳、以下老年者群と略す）、65歳未満5名（平均年齢57.0±6.6歳、以下中高年群と略す）で、最年長は75歳、最年少は49歳である。性別は、男性3名、女性4名であり、老年者群は男女1名ずつ、中高年群は男性2名、女性3名であった。

2. STAIによる告知前後の不安の推移

年齢群別に比較すると、中高年群は、告知前の状態不安の平均は51.8点、特性不安は49点であるのに対し、老年者群ではそれぞれ29.5点、31点であり、老年者群のほうが、全体的に不安は低い傾向であった（表1）。

また、各々の群の告知前後の変化をみると、中高年群は、告知前の状態・特性不安の平均はそれぞれ51.8点と49点であり、告知後は51点、43.8点と下降した。一方、老年者群では、告知前の状態・特性不安の平均は29.5点と31点、告知後はともに34点と上昇した。更に中高年群では、告知後に特性不安は全員下降、状態不安は上昇した者が3名、下降した者が2名であり、老年者群は、状態・特性不安ともに上昇した。なお、一般的な健康な45～64歳の平均は、状態不安は36.2点、特性不安は38.5点であり、65～74歳では、それぞれ34.5点、36.5点であるので、老年者群は告知前・後とも一般平均より低く、中高年群はいずれも

高い不安を示した。

表1. 告知前後のSTAI得点

高齢者群					中高年群				
	状態不安		特性不安			状態不安		特性不安	
	告知前	後	前	後		前	後	前	後
事例1	34	42	38	38	事例3	57	46	51	50
2	25	26	24	30	4	54	57	68	60
					5	50	48	48	37
					6	62	67	46	43
					7	36	37	32	29
平均	29.5	34	31	34		51.8	51	49	43.8
SD	6.36	11.31	9.9	5.66		9.86	11.42	12.88	11.9

考察

STAIの不安得点全体において、老年者群は中高年群に比べ、不安得点が低い傾向であった。老年者は一般的に、年齢に応じてライフスタイルを変更してきているため、何かの出来事が起こっても、生活に大きな変化が生じにくく、また、これまでの人生において、様々な経験をし、自分なりに対処してきたという実績が多いことや、家族内での役割期待が、中高年に比べ少ないことも影響して、不安が低い傾向であったと推察される。さらに、肺がんではないかと疑っているながらも、これまでに、配偶者や兄弟、友人の死などを経験し、死を身近に感じることや、病气や死を覚悟することができていたことも影響していると思われる。

中高年群で、告知前の不安が高い傾向が見られたのは、肺がんという病名を予期していながらも、それぞれが持っている役割や責任から、そうでありたくないという気持ちが強いためであると思われる。

次に、告知後の不安得点の平均を比較すると、中高年群は告知前に比べ、告知後に不安得点は下降したのに対し、老年者群では上昇した。告知を受けた直後に、中高年群は、肺がんを疑う不確かな状態から抜け出し、告知されたことを受け入れ、今後の人生を再構成するために、早く適応しようとする努力を始めると推測される。ただし、中には1～6点の範囲で上昇している例もあり、個々の差を無視することはできない。なお、中高年群のうち、最も不安得点が低かった対象者は、胃がんの告知を受け、手術により完治した既往があるため、前回の危機にも対処することができたという経験が、不安を軽減させていると考えられる。

一方、老年者群になると、告知を受け、治療についての説明を受けると、身体的・精神的・経済的な面で、肺がんという大きな病气や治療の副作用に耐えてゆく自信がなくなり、治療の副作用や病气の予後といったものに対して不安が大きいたことが予測される。

以上のことから、老年者に対しては、治療の経過や副作用について十分な説明を行うとともに、身体の状態を把握し、伝えていくことが必要であると思われる。また、中高年に対しては、告知前から準備状態を整えることができるように、的確な情報提供が必要であると思われる。

本来、STAIで状態不安のテストを行うときには、ある特定の状況に対する不安について答えるよう、よく説明するため、その人の生活背景は反映されないはずである。しかし、今回の研究では、告知を受けたことに関する不安について解答を求めたが、同席して面接を行ったことにより、研究者の問い方などから、生活背景が不安得点に影響した対象者もいた可能性がある。よって、一概に告知のみを焦点とした解答であったとはいえない。また、対象者の人数が少ないため、この結果のみでは、高齢者と中高年の特性を説明しきれものではなく、今後の積み重ねが必要である。

結論

1. 告知前後の不安得点の比較から、老年者は中高年に比べて、全体的に不安が低い傾向がある。
2. 老年者は、肺がんを告知され、治療についての説明を受けたあとで、不安得点が上昇するが、中高年では、対象者により上昇するものと下降するものがあり、個人差が大きい。

文献

- 1) 水口公信, 下仲順子, 中里克治. 日本版 STAI 状態・特性不安検査. 京都: 三京房; 1991.